

## 名古屋市博物館

### 特別展『海たび 尾張・知多の海とひとびと』

開催期間：平成30年7月14日（土）～平成30年9月17日（月・祝）



#### 【企画展の内容・目的】

- 愛知県の尾張・知多地方には歴史・漁業・食・祭りや信仰・娯楽など多岐にわたって海の文化が豊富に存在すること、その海の文化には当地方独特の特色があり人々の暮らしや精神文化、政治権力の発達などとも深く関わっていることを紹介する。
- 現地見学ツアーや子供向け学習メニューなどの各種付帯事業を開催し、海の歴史文化を学習するきっかけとする。また、自分たちの日常とは異なる地域世界の存在を知り興味や親しみを感じることで、現地へ観光・遊び・学習等に行ってみたくなるようにし、文化史的魅力を観光振興にも役立てる。

## 1. 企画展示の内容

- 開催期間：平成30年7月14日（土）～平成30年9月17日（月・祝）
- 開催場所：名古屋市博物館 特別展示室・部門展示室
- 入場者数：12,216人



名古屋市博物館 外観



企画展会場 入口



序章「尾張・知多の海」。本特別展全体を理解するための導入部分である。江戸時代以前の古地図や現代の立体地形図によって、尾張・知多地方の海と沿岸部の古地形の特徴を示す。古地図の描き方や内容を通して、江戸時代以前から当地方の人々の間では、伊勢湾を中心に据えた地理観や、伊勢湾の影響を強く受けて自らの歴史的・文化的地域性が形成されてきたという地域認識が存在したことを学ぶ場とした。





第Ⅰ章「海からはじまる古代史」。文献史料に残る尾張・知多地方の古代氏族に関する記録や神話を読み解き、実際の考古資料と一緒に展示した。考古資料からは海を背景に当地方を支配する首長層の交流ネットワークや軍事・政治力を明らかにし、古系図、古文書の氏族伝承、神社の古絵図などから古代氏族の出自や同族関係などを見出した。当地方の古代の地域社会形成が海浜部の地域およびそこに暮らす人々の集団を基礎にしていたこと、伊勢湾両岸の遠隔地域間を一つに繋ぐ役割を果たしてきた海の社会的役割の重要性を学んだ。同時に、現在では市街地化した名古屋において忘れられたかつての海岸線が意外にも身近な場所にあったことを認識し、海と地域史との関りがごく身の周りにあることを学んで、以後の章の観覧と理解の導入としてもらった。



第Ⅱ章「海の地理環境」。尾張・知多地方の沿岸部が描かれた、江戸時代の絵図を展示。昭和初期の海図をもとにした海底模型を展示して、尾張・知多の海の特徴を示した。尾張南部（伊勢湾最奥部）では大小さまざまな河川が海に流れ込み、干潟が点在する環境であり、知多半島では大きな河川がなく、丘陵部が海岸に接近し、砂浜が広がるという違いを理解することにつながった。

また、海底の地形や地名が示された絵図や記録を展示し、海を生業の場とする人々の中で、海の環境が認識され、知識や経験として伝えられてきたことを示した。海の環境を知るための方法として、海上の位置を確認するためのヤマアテについて体験コーナーとあわせて紹介した。



第Ⅲ章「尾張・知多の漁と暮らし」。特に漁業を例として、尾張・知多の沿岸部の生活とその特徴を示した。伊勢湾奥部の尾張と伊勢湾中央部の南知多について、昭和期まで使用された漁具や漁撈記録、古代の考古資料などを展示し、沿岸部の生活が、古代から現代まで変わらずに続いてきたことを紹介した。

現在の名古屋港付近で使用された漁具から海苔養殖や採貝漁を紹介し、南知多師崎で主に使用された漁具からタコ漁やサメ漁を紹介し、地域ごとに特色ある漁が展開したことを示した。昭和期の漁が写された写真スクリーン、漁船の様子を俯瞰的に示した船上配置展示（助成金仕様）によって、より実感を持ってもらえるように工夫した。

漁の様子が描かれた明治初期の水産資料、尾張・知多の産物が示された資料を展示し、現在に至るまで尾張・知多で展開された漁の様子、特色をより具体的に示した。



第Ⅳ章「島々をゆく」。知多半島先に位置する日間賀島・篠島・佐久島における古墳・遺跡、祭り、江戸時代以来の漁撈、地質などから、現代の姿にも伝統をなお残す島の歴史文化の特徴を明らかにした。また、古代における伊勢湾対岸の伊勢・志摩地方の沿岸部のようすや、同地方と尾張・知多との間にまたがる地域圏を浮かび上がらせた。これらを通して、多様な地域の要素が混じりあう、漁撈集団と交易集団と武装集団という多面性をもつひとつひとつ、距離の近さや陸続きであることを前提としない地域圏、といった「島」という地域環境の特殊性を説いた。海が地域や出自、生活様式・習慣などを異にする多様なひとつひとつを広く面的につなぐ存在であったことを学習してもらった。





第V章「海の祭りと信仰」。舟形の山車、船絵馬、近世・近代の文献や絵図、信仰関係資料を用いて、海の怪異現象や海獣の接岸、海上安全の祈りなど、陸とは異なる人知の及ばない世界としての海に対する畏怖や信仰、沿岸部でおこなわれる海と関わる祭礼について紹介した。現存例のきわめて希少な、船大工の技術で造られた本格的な船形の山車「船車」と大漁旗を効果的な照明で演出しながらシンボリックに露出展示し、海の祭礼の華やかさ、迫力、海に生きる人々がそれらに込めた祈り・願いなどを迫真に感じさせる工夫をほどこした。伊勢湾沿岸部の人々の精神的営為を理解すると同時に、観光や祭礼などの文化資源としての海の文化の魅力や、当地方の人々が海に敬意を払いながらその恵みを享受してきたことを学んでもらった。



第VI章「海と遊び」。海水浴、観光と魚釣りをテーマにして、海の楽しさや、人々が行楽・遊びの場として親しんできた海の姿を紹介した。

絵葉書や古写真、観光パンフレット、海水浴の絵日記など、来館者の記憶や経験と密接に結びつく資料を数多く展示することによって、実際の経験と海の思い出を結び付けて展示を閲覧できるようにした。観光土産や釣りに関する資料を通して、観光や釣りが、人気のある娯楽として現在まで続いてきたことを示した。

また、名古屋市内の小学校と連携して、児童とその保護者の海の思い出を募るアンケート調査の結果をパネルで紹介した。小学生の海の思い出と、身近な大人である保護者の思い出を対照することによって、現在の小学生にとっての海の思い出も、過去からのつながりがあることを示した。



第七章「尾張・知多の湊と船」。熱田と桑名（東海道の航路）、尾張・知多と関西や関東地方（廻船の航路）を結ぶ航路が示された絵図や記録を展示して、海を介した活動が広域にわたり、海路が尾張・知多の発展を支えたことを示した。大阪市住吉大社の常夜灯（助成金による調査）やかつての湊の風景を写真パネルで紹介し、海路について具体的なイメージをみて観覧できるように工夫した。

絵図、絵葉書、昭和から現在までの写真などを紹介することで、現在のように、日本有数の貿易港に発展する名古屋港の変化を追った。現在の名古屋は工業や貿易が盛んであり、海との結びつきがみられないが、海路や港などが身近にあり、海を介して発展したことを示した。



終章「尾張・知多の海」。本展の準備調査のなかで新たに撮影した、祭礼行事、史跡、漁撈、景観、海鮮など、尾張・知多地方海浜部のさまざまな文化的風景の動画を編集し、映像展示として構成した。この終章までに観覧し学習してきた膨大な量と種類の海の歴史文化を、最後にこの映像によって可視的にイメージ化することで、観覧者各自が情報を整理して振り返り理解することを狙った。当地方の文化の成立背景としても、環境・生業（産業）を守り維持していくためにも、海を学び親しむことが現在と未来に向けて重要であることを学んでもらった。

## 【来館者の声】

- 昔から海は本当に必要とされ大切にされていて、時代が変わっていろいろなことが変わった今だからこそ、きちんと海を守っていかないといけないと思った。
- 海は食糧を得るための貴重な場所だったと感じた。
- もっと海のことを知りたくなり、海が大切なんだなと思った。
- 海から私たちの生活・歴史が始まっているということ、昔から海の恵みのおかげで生活でき、文化が発達してきたということがよくわかった。



## 2. 関連事業の内容

### ■ 記念講演会「尾張・知多をめぐる海の文化」

【開催日時】平成30年7月14日（土）13:30～15:00

【開催場所】名古屋市博物館 講堂

【参加者数】100人

【実施内容・目的】

- 本特別展の開催を記念する講演会として、野地恒有・愛知教育大学教授を講師に招き、伊勢湾をはじめ各地の漁撈や、海に関係する民俗文化について講演してもらう。講演を通して、本特別展に対する興味・関心を深めるとともに、地域を問わず日本文化の中に潜在する「海洋性」と、尾張・知多地方におけるその事例を知ること、われわれの地域や文化・習慣の形成に海がどれほど深く関係しているかを再認識する。



開催場所の全景



講師紹介の様子



野地恒有・愛知教育大学教授を講師に迎え、当地方の海に関する民俗、日本文化の特質の中に潜在する「海洋性」についてご講演をいただいた。はじめに、講師の姿勢として、民俗学から海、漁業を同時代生活史としてとらえる立場から、昔のあり方を求めるのではなく、現代的な操業形態を民俗学的に考えるのだ、という説明を受けた。海辺や漁民に関する話に限定せず、海を基軸として日本文化をとらえる必要を唱えられた。





「海と日本文化ー日本文化の海洋性」として熨斗袋、熨斗アワビ、清めの塩、年越しの魚などの事例から、日本文化の中に海との関わりが内在していることを指摘された。「民俗学から見た愛知（尾張・知多）の漁業の特徴」では、篠島のシロメ・コウナゴ漁、佐久島のナマコ曳き漁について紹介された。長年にわたる調査研究の成果である写真や調査事例、調査の経験を交えて、臨場感のある事例の提示をされ、身近な生活の中でみられる伝承文化について、柳田国男や折口信夫をはじめ、民俗学的な解釈を分かりやすく紹介し、民俗学的な視点から解説された。



本講演を通して、以下のような学びを得ることができた。海の文化は海辺や漁業に関係することに限定されず、広く日本文化に通ずるものであること。本展覧会が意図する、それらを訪ね、調べ、知り、親しむという「海たび」は、いわば日本文化の旅であるともいえ、日本文化の海洋性を探ることにつながる。昔の姿（機械化される以前の姿）をとらえるだけでは、尾張や知多の漁業について正しく理解できないこと。機械化された操業形態の中に、伝統的な技術や知識のあり方、自然と人間の関係を窺うことができること。

### 【来館者の声】

- 生活、歴史、郷土の地域、日本文化など、さまざまなことが海と関係しているということを実感できた。
- 沿岸部でなくても、生活に海が関係しているという話は興味深かった。
- 我々の日常生活に「海」が深く入り込んでいることに気が付いた。

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等ではできません。

## ■子供ワークショップ「海たび展探検ツアー」

【開催日時】平成30年7月22日(日)・8月13日(月)・8月29日(水)  
10:30~11:50、13:30~14:50 (計6回)

【開催場所】名古屋市博物館 展示説明室・特別展示室

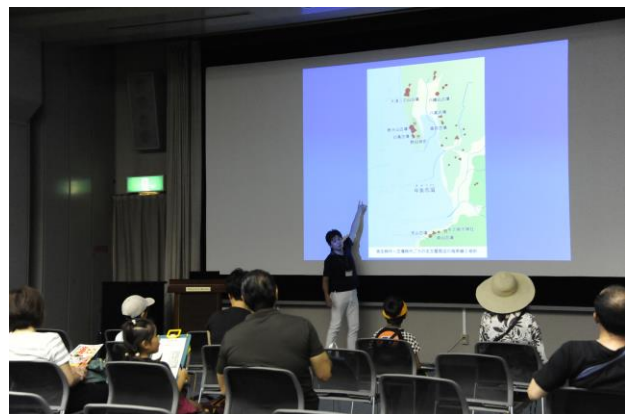
【参加者数】合計120人

【実施内容・目的】

- 「海の特産品ができるまで」と「古代の海の王とひとびと」の2つの異なるテーマを設定して、学芸員の解説・案内により本特別展を見学し、ワークシートに記入しながら学習する。さまざまな海の文化があることを知り、自らや地元地域を取り巻く海との関わりに対して、理解や興味関心を深めることを目標とする。



開催場所と入口サイン



概説レクチャーの様子

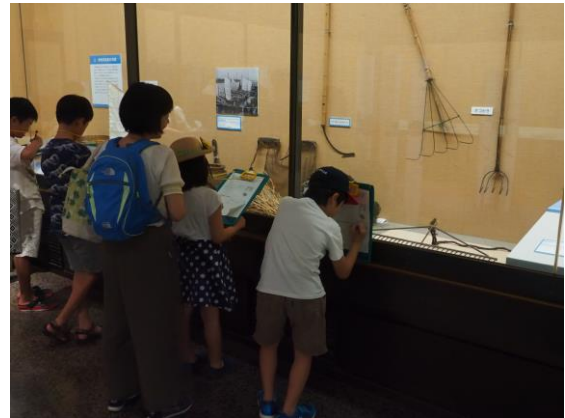


尾張・知多の古代の海人集団の活躍と首長権の成立、近世～現代の海岸線の移り変わりや漁撈のようすをそれぞれ主なテーマとして、古文書、神社や古代氏族の伝承、古墳・遺跡からの出土資料、古地図・古絵図、漁撈用具といった展示資料をもとに、学芸員の解説に導かれて各時代の当地方の海とのかかわりを考え、ワークシートを記入しながら学習してもらった。同時に、展示資料のどういう点をどのように見て何を読み取るのかという学習方法を学び、地域の歴史像のイメージを膨らませる機会とした。





最初に時代・地理的な背景、予備知識を別室でレクチャーした後、展示室でテーマにかかわる箇所を巡りながら解説した。展示資料に即して、それが何を意味しているか、どんな時代像でどんな人々が活躍したのかを見ていくことを通して、歴史を知ると同時に、話題への期待感を高め、展示資料のどういうところに着目すべきなのかという視点を覚えてもらった。



最後に、関係の展示資料の中から特定の一部資料を取り上げ、当地方においてとくに特徴的な海の歴史文化の話題を具体的に解説して、ワークシートを完成させた。古代以来、日間賀島などの島嶼部や知多半島沿岸部の人々は漁撈に従事したが、とくにサメなど獰猛な大型海洋生物と格闘する漁をおこない捕獲・利用していたことや、伊勢湾奥の名古屋周辺の海浜部が遠浅で藻場の広がる好漁場であり「藻魚」や貝類などの名産品と賞される漁獲物があったことなど、海を舞台にした当地方の人々の生活と環境のようすを紹介した。独特の特色ある漁撈、海的环境変化などを通して、当地方の人々が古代以来海を基礎として地域を発展させてきたことを学んでもらった。

### 【来館者の声】

- 年々、海が少なくなっているんだと感じた。将来、海がなくならないようにしたい！！
- 漁のためにいろいろな道具に工夫がされていて、それで魚や海などを捕るので海は大切だと思った。食べ物も大切なのだと思った。
- 時代とともに埋め立てが多くなり、その代わりに干潟が減って、海の生態がずいぶん変わってしまうのだろうが、生き物が当たり前に住める環境がこれから先もずっと続いてほしいと思った。

## ■海のロープワーク体験

【開催日時】平成30年7月15日(日)・7月21日(土) 10:30~12:00、13:30~15:00 (計4回)

【開催場所】名古屋市博物館 展示説明室

【参加者数】合計71人

【実施内容・目的】

- 海洋少年団による実演とレクチャーの後、ロープワーク・手旗の体験や、キーホルダー作りをおこなう。港湾や船舶への関心を誘うと同時に、特別展の港・船に関する部分の理解を深める。



開催場所の全景の様子



手旗信号の実演の様子



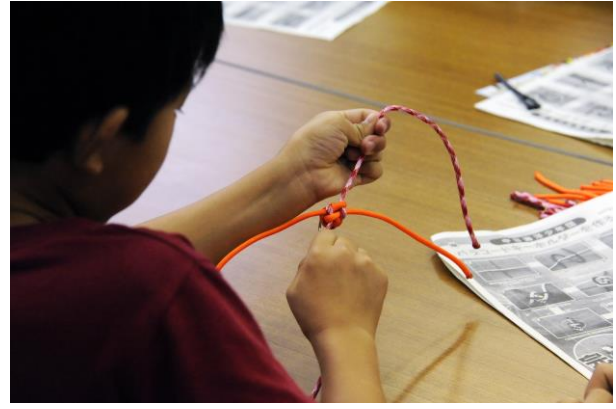
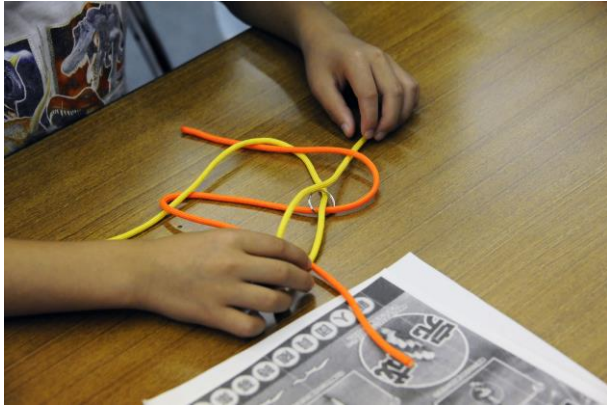
はじめに、手旗信号を中日海洋少年団の団員数名で披露した。海上での、船と船(双眼鏡等で可視化できる程度の距離)のやりとりに使うことや、数字やカタカナの表記の仕方など具体的な説明を受け、受講者は手旗信号を身近に感じることができた。

その後、3グループに分かれて、①ロープワーク②キーホルダー作り③手旗信号をそれぞれ数名に分かれ、団員によるマンツーマンで指導を受けた。

ロープワークでは、港に船を係留する際に使う、ほどけない結び方「もやい結び」や、ほどけやすい結び方「引き解け結び」など色々なロープの結び方を学んだ。

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等はいけません。





パラコード（パラシュートに使用される強度のある紐）を使って編み込むキーホルダーを、受講者一人ずつ制作。成果物は各自持ち帰りとした。



手旗信号では、イロハニなどの文字の姿勢について、1文字ずつ説明を受けた。受講者は思い思いに自分の名前など身近な言葉を手旗で表現し、最後に信号を送り合い、内容について確認をした。

以上のように、本イベントでは、海上での通信手段やロープワークの技術など、海洋少年団による海に関する活動について、説明や体験を交え、身近に知ってもらい、海や船に関する知恵や工夫、技術などを学ぶ機会となった。博物館に訪れた子供たちが、海に関する行事に取り組む同世代の海洋少年団と交流し、話を聞き、体験をしたということも、船や港湾に対する興味を持つ機会となった。同時に、本特別展の港・船に関する部分の理解やイメージを深めることにもつながった。

### 【来館者の声】

- 船から船や、山から山など遠い所で話す旗のやり方を学べてよかったです。
- 海洋少年団の方々の活動を初めて知りました。海が人を育ててくれる、人が海を守っているという感想をもちました。
- 人が海で活動する為に、昔からいろんな工夫がされてきたことを改めて感じる事が出来ました。

## ■ミュージアム・トーク

【開催日時】平成30年8月4日（土）・8月11日（土）・9月1日（土）  
11:00~11:30（計3回）

【開催場所】名古屋市博物館 展示説明室

【参加者数】（第1回）30人 （第2回）41人 （第3回）28人

【実施内容・目的】

- 尾張・知多地方（尾張南部、知多半島西岸）の中でも伊勢湾最奥部に位置し、干拓により海との関わりを喪失した名古屋周辺にも、かつては豊かな海の生態と漁撈資源があったことを学んでもらうための講演会。
- 海の地形、藻場などの自然、人々の生業など海を取り巻く環境の変化が、当地域の海の記憶の衰退と大きく関わっていることを知る機会とする。



開催場所の全景の様子

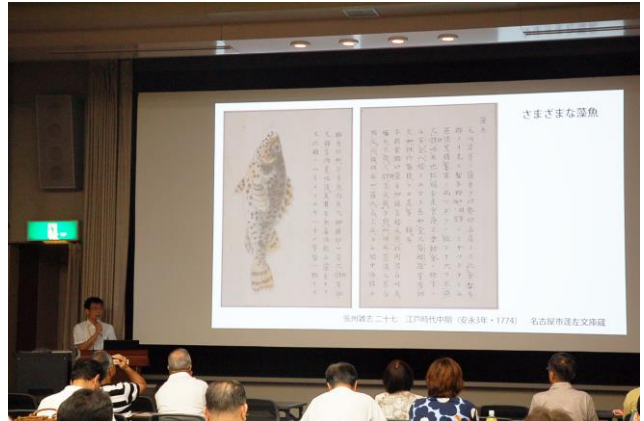


来聴者の様子



第1回目は「幻の名産「藻魚」を追え」をテーマとし、尾張・知多地方（尾張南部、知多半島西岸）の中でも伊勢湾最奥部に位置し、干拓により海との関わりを喪失した名古屋周辺にも、かつては豊かな海の生態と漁撈資源があったことを紹介する内容の講演。





現在の伊勢湾奥部では漁業が行われておらず、海産物が地域のイメージに結び付くことはないが、江戸時代の地誌には名産についての記載がある。その名産の中にはオゴ（海藻）、牡蠣、ボウなどの他に、「藻魚」が挙げられる。現在では一般的でなくなった「藻魚」に焦点を当て、・藻魚とは何か？、幻の名物とはどういう意味か？、それらは尾張・知多という地域とどう関わるか？などの問いを設定し、講演をおこなった。

パワーポイントで江戸時代の地誌の写真を紹介し、「藻魚」の記載があることや、「藻魚」の特徴を確認した。そのままでは分かりづらいので、書き出し、現代訳を提示して、内容への理解を深めた。近世の絵図、昭和期の漁の写真画像で示し、海の名物が生まれる背景を解説した。「海の学び ミュージアムサポート」P1 支援により作成した藻魚模型（タケノコメバル模型）の写真を使用して、藻魚の具体像を提示し、同模型や関係資料が展示してある展示室への導きをしかけた。



現在は貿易・工業のイメージが強い名古屋港にも、かつては海の名物があった。その代表格のひとつである「藻魚」とは、アマモなどの藻場をはじめ、浅海の伊勢湾沿岸部に生息する魚の総称でアイナメ、クジメ、メバルなどを指しており、知多だけでなく尾張（熱田）の名産であった、ということを知ってもらった。「藻魚」という言葉が一般的でなくなった背景には、藻魚をめぐる海の変化（伊勢湾奥部の漁業、海の変化）が大きく影響しているということを知ってもらった。



開催場所の全景の様子



導入部分の解説の様子



第2回は「海を渡りゆくひとびと」をテーマに、日間賀島・佐久島・篠島および知多半島沿岸部の遺跡・古墳や出土品、神社、地理環境を取り上げ、伊勢湾対岸の伊勢・志摩地方との比較や関連性を通して、当地域の広域的な海上世界の広がりを知る目的の講演をおこなった。集落遺跡の出土品から窺える生業、古墳の石室構造や出土した特殊な形状の土器、神社の成立背景や祭礼形態、沿岸部の地形や潮流をもとに、島嶼部と伊勢湾両岸に人々のどのような行動、どのような地域圏が形成されていたかを解説した。そこには、海を渡りゆくことを日常の生活とし広域・広汎な活動能力を有する人々の姿があり、彼らが当地方の文化形成に大きな役割を果たしていたことを紹介した。



15年前から自ら調査してきた日間賀島・佐久島・篠島と知多半島沿岸部の古墳・遺跡の特徴や、H29年度「海の学び ミュージアムサポート」P3 支援により調査した伊勢・志摩地方沿岸部の古墳と遺跡、伊勢湾湾口部の神島の信仰や環境を、パワーポイントを用いて画像で示し、伊勢湾の島嶼部を中心とした海上世界の歴史・文化のイメージを概観した。

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等はいけません。





そこには伊勢湾兩岸と島嶼部をまたぐ、土器などの物資の流通や、類似した生業形態、信仰上の関わりがあることを知ってもらった。  
 最後に、佐久島・篠島および知多半島と三河地方の一部、対岸の志摩地方にのみ限られた分布圏を形成する、特殊な須恵器・土師器の高坏や石棺を取り上げて、海に暮らす人々の地場としての「地域」がどのようなものであったかを説明した。これらは生活様式・習慣、石材産地と喪葬文化の広がりとの共有を示唆しており、生活文化を共有する地域社会・地域圏が伊勢湾をまたいで広がることから、島嶼部・沿岸部の人々が海を渡りゆくことを日常とし、海上世界として一つの地域を形成していたことを明らかにした。海から地方を見る視野、当地方の文化の大きな構成要素として海を軸にした人々の活動があったことを学んでもらった。



開催場所の全景の様子



導入部分の解説の様子



第3回は「沿岸部の信仰・怪異」をテーマに、尾張・知多地方（尾張南部、知多半島西岸）の海にまつわる信仰・怪異現象を紹介し、それらを通して、当地域の海に根差した精神文化の一端を窺う内容の講演とした。

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等はいけません。



海中海上で出会う怪異として、蜃気楼・神遊・船幽霊・あやかしの怪といった海中で遭遇する怪奇現象・伝承とそれに対する人々の受け止め方や、怪物・異形などと称されたアザラシのような海からたどり着く未知の生物が伊勢湾内に迷い込み、見世物になる場合もあったことなどを紹介した。また、尾張・知多で展開する海に関わる信仰について、青峯山正福寺（三重県鳥羽市）への信仰が現地だけでなく、尾張・知多でも独自に展開したこと、津島神社（愛知県津島市）の天王信仰が海を介して伊勢湾沿岸各地に伝わるという現象を紹介した。



近世尾張の地誌（尾張名所図会や張州雑誌）の記事にみられる具体的な怪異の事例、H29年度「海の学び ミュージアムサポート」P3 支援により調査した青峯山正福寺の境内や所蔵絵馬などの写真をパワーポイントの画像に利用し、信仰の具体的なイメージを提示した。また尾張・知多でみられる青峯山祠や祭礼、近世地誌や祭祀物から知られる天王信仰の様子を紹介し、尾張・知多で展開した海にまつわる怪異や祭礼・信仰を具体的に解説した。



これらの事例を通して、海は人々にとって危険をともなう場所であり普段の生活とは異なる世界と認識され、そのため海は怪異が起きる場所とされたことがわかる。一方で、青峯山正福寺に対する信仰は海とのつながりの表れであり、尾張・知多では現在は海から離れている地域でも独自の青峯山信仰がみられるのは、漁業や廻船業など生活・生業が海と密接に結びついて営まれてきたことを示している。天王信仰は海を媒介とした信仰であり、海に厄災を流し清める祭礼である一方で、その厄災が海からもたらされると考える地域、それとは逆に豊漁や幸福がもたらされると捉える地域など、各地で異なる性質がみられる。



## 【来館者の声】

### 第1回

- 海的环境・生き物を守ることが重要だと思った。
- 名古屋の海に豊かな自然があったこと、そこに海と生きる人々が多くいたことを学んだ。
- 海が生命の素であることを今更ながら感じた。

### 第2回

- 海で暮らす人々のネットワーク、文化圏の存在など、これまであまり考えたことがなかったことを学ぶことができた。
- 海は人々を隔てるものではなく、多くの時代に物や人を運び人々を結ぶ存在だったことを強く感じた。
- 海を越えた地域間の交流や、古代の人々が海を大切に思って利用していたことがよく理解できた。

### 第3回

- 海とともに生きてきた人々の歴史を知ることができた。
- 今は海から離れている地域にも、かつては海と暮らしていた痕跡がたくさんあるのを初めて知って面白かった。
- 漁師にとって海は危険なもので、それを回避するために昔からいろいろなことを人々がしていたことを知った。海は危険なものだが、豊かな恩恵もあり、人間が海に関わる上で永遠のテーマなのだと思う。

## ■ハンズオンコーナー「船絵馬・大漁旗を作ろう」

【開催日時】平成30年8月11日（土）～8月19日（日）  
9:30～17:00

【開催場所】名古屋市博物館 部門展示室

【参加者数】船絵馬 478人・大漁旗 153人

【実施内容・目的】

- 実物を縮小したサイズの板・布を材料にして、自作の船絵馬および大漁旗を描く体験をする。実物資料を目の前にしながら自分で描いてみることによって、船絵馬や大漁旗を作った海浜部の人々の願いや思想の一端に触れることを目標とする。



開催場所の全景の様子



開催場所の様子・近景



展示室の一角にハンズオンコーナーを設けて、船絵馬、ミニ大漁旗を作成できるコーナーを設けた。実物を縮小したサイズの板・布を材料にして、自作の船絵馬および大漁旗を描く体験をする。コーナーの周囲に大漁旗や船絵馬を展示しており、実物を見ながら体験活動ができる場所にした。

対象は小中学生であり、体験を希望する来館者に対して材料を渡す形をとった。大漁旗はターポリン素材の布、船絵馬は小さな絵馬用の札であり、どちらの体験でも色鉛筆を使用した。





展示をみるだけでなく、実際に制作することで、展示をより注意深く見学し海の文化を理解するきっかけとなり、海に関する願いや祈りを深く学ぶことにつながった。また、海に関する楽しい思い出(夏休みの海の思い出)を素材にする参加者も多かった。「海の楽しさ」と「願い」「信仰」を結び付けて考える機会となった。



ミニ大漁旗、船絵馬それぞれの参加者に、体験の材料とともに解説シートを配布した。シートオモて面には船絵馬や大漁旗について、イラストを多用して、小学生向けの文章で解説した。裏面には作り方(描き方)の手順を図示し、低年齢の参加者も体験しやすいようにした。解説シートを配布することによって、体験活動中の参考素材を提供するだけでなく、帰宅して振り返り学習をするようにした。

体験コーナーの近くには、実際の大漁旗や船絵馬が展示してあり、体験とともに実物資料を観覧することを勧めた。

### 【来館者の声】

- 海は昔から信仰の源だったのだと思った。
- 大漁旗はカラフルな色使いで、遠くの船からも良く見えるデザインになっていると思った。
- 海の仕事をしている漁師さんたちにとっての、魚を捕ることの難しさや大漁の喜びが伝わってきた。

## ■海のシンポジウム「海たび 伊勢湾から大阪湾まで」

【開催日時】平成30年8月25日（土）13:00～16:00

【開催場所】名古屋市博物館 講堂

【参加者数】63人

【実施内容・目的】

- 和歌山・大阪を主なフィールドとする考古学研究者である河内一浩・羽曳野市世界文化遺産推進室主幹を講師として、大阪湾岸・和歌山沿岸部の歴史文化の特色についてご講演をいただき、伊勢湾沿岸地方との共通性や交流について対談するシンポジウム。
- 展示で紹介した尾張・知多を中心とした伊勢湾沿岸地方の海の文化が、外部、他地方との間にどのような広がりをもっているのかを知ってもらうことを目的とした。



開催場所の全景の様子



講演導入部の様子



河内一浩 氏（羽曳野市市長公室世界文化遺産推進室主幹）から「海たび 紀伊・和泉・河内の海とひとびと ～紀伊半島・大阪湾岸～」と題して講演をいただいた後、その講演内容と本展の展示内容を踏まえて、藤井康隆・長谷川洋一（名古屋市博物館学芸員）とともに3名で大阪湾岸・和歌山沿岸部と伊勢湾沿岸地方との海の歴史文化の共通性や交流について対談した。河内氏の講演では、大阪湾岸に立地する古墳時代中期～後期の大王墓（天皇陵）を取り巻く様相から説き起こし、紀伊半島の首長墳や、大阪湾岸・紀伊半島の「海部」集団などについて話題を展開して、同地方の古代の海の歴史文化の全体像を知ることができた。

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等はできません。





尾張・知多の海と大阪湾は海の地形環境がよく似ており、同様に蛸壺漁や土器製塩が古代からおこなわれてきた。また沿岸部の首長墳が顕著にみとめられる点でも共通する。尾張・知多の製塩土器は大阪湾岸から製塩土器および製塩方法が伝わったものであることが説明された。河内氏の研究にもとづき、大阪湾岸地域における蛸壺漁の盛衰の動きは、陸地の開発・産業による環境破壊と密接に関係している可能性が指摘された。古代における両地方の生業の交流、古代以来の海的环境変化とのその原因について知ることができた。



紀ノ川下流域を中心に現れた「淡輪型埴輪」という特殊な埴輪の伝播や、紀伊国海部郡の存在、外海から入り組んだ潟海を港湾とする遺跡のあり方、その潟海に臨む「海浜型前方後円墳」といった、海との関わりを強く示す地域像や考古学的資料を示すことによって、地方を超えた遠隔地間交流のようすが明らかにされた。地形的特徴とともに考古資料や民俗資料などを合わせて理解することで、文化・技術の伝播や物資の流通のルートとして海が遠隔地をつなぐ幹線ルートの役割を果たし、そのなかで大阪湾岸・紀伊半島と伊勢湾沿岸との結びつきは東西日本の橋渡しという点で日本史において重要であることを学んだ。

### 【来館者の声】

- 次の世代に、人が生活できるような海を残していかなければならない。そのために過去のことも知らなければならぬと思った。
- 人間（の開発）活動と自然・漁業との調和の難しさを感じた。
- 海から陸を見る視点の大切さ、海を通じた文化的ネットワークの存在を学ぶことができた。

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等はいけません。

## ■現地見学バスツアー「日間賀島の海の歴史さんぽ」

【開催日時】平成30年7月27日（金）・9月8日（土）

9:00～17:00（計2回）

【開催場所】日間賀島（愛知県知多郡南知多町）

【参加者数】73人（各回定員40人；7/27：41人、9/8：32人）

【実施内容・目的】

- 本特別展のテーマの一つである島嶼部の歴史・文化について、実際に現地の史跡・風景・文化財を自分の脚で歩きながら見学する。学芸員が同行して解説するほか、日間賀島観光協会の協力により、島の食文化についても知り、味わってもらう。
- 博物館の展示だけでは伝えきれない、島の景観や風土環境、現地島民の生業・地理観・精神文化などを体感して、海と島に親しみを抱かせることを目標とする。



集合場所に待機するツアーバス



日間賀島資料館



親子参加のバスツアーとして催行し、子供の知的関心を刺激する場、自由研究の場を提供するとともに、これを通じて大人にも主体的に島や海への興味と理解を深めることを目的とした。最初に、日間賀島資料館の展示を見学して、同島の歴史や特徴的な漁業文化について学び、どのように島の人々が海と関わってきたかを学んでもらった。その後、島内の漁港、古墳、神社、島を取り巻く海や対岸の風景を歩いて見学しながら、歴史的な背景を説明することで、参加者自身の生活が海とともにあることを実感してもらった。

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等はいけません。





学芸員の説明を聞きながら、実際に現地の史跡・風景・文化財を自分の脚で歩きながら見学し、島嶼部の歴史・文化とその特色について学んだ。また、島の海産物による食文化や、海に親しむ機会として干潮の磯や浜辺で生物観察をする、イルカに触れるなどの「楽しみ」のメニューを盛り込んだ。体感と知識の両面から海への理解と親しみと感動を得て、学問的学習の方法と関心を身に着けることを目標とした。



島内の地層露頭を実際に観察して、島がどのような地質から成り立っているか、その地質から得られる石材をどのように利用してきたかを説明した。海に臨む岬に立地する古墳群を見学し、その築造背景、被葬者集団の活躍、島に暮らす人々の地理観などを、風景をもとに想像してもらった。海が海産物生産、物資流通、交通など尾張・知多地方の生業と文化の発展において必須であったこと、その中で島の人々が海を支配する集団としてきわめて重要な役割を果たしてきたことを学ぶ場となった。

### 【来館者の声】

- 昔の島での漁の仕方や道具を初めて知ることができ、海は人々の生活に根付いて、大切な生活の一部なんだなと感じた。
- 人が生きていくために、海がどんなに必要であるかを知ることができ、とても有意義な一日だった。
- 海は、海水浴をしたりする場所という感覚が大きかったが、海からの恵みをあらためて感じた。

## ■疑似体験コーナー「ヤマアテ」

【開催日時】平成30年7月14日（土）～9月17日（月・祝）  
9：30～17：00

【開催場所】名古屋市博物館 特別展示室

【参加者数】本展入場者のおおむね全員に参加・観覧いただいた。

【実施内容・目的】

- 海上で自分自身や漁場などの位置を確認するための伝統的な方法である「ヤマアテ」の原理を疑似体験し、海に生きる人々の知恵を知る機会にすることを目的とした。
- 一人一人の漁師の経験によって長い年月をかけて生活の知恵を伝承させてきたことを知り、生活・生業の中でどのように海という環境と向き合ってきたかを学んだ。



開催場所の全景の様子



「ヤマアテ」の記録資料の実物展示



ヤマアテとは、海上で位置を確認するための方法である。地上に目標となるものを定め、複数の方向での見え方を合わせることによって漁場などの位置を確認した。展示室の一角で、ヤマアテを疑似体験し、その仕組みを学ぶことができる体験コーナーを設けた。コーナー内二か所に模様を記した3本のポール（計6本）を設置し、特定の場所から見ると、模様の重なりが特定の形（星と魚）に見える場所を作った。





陸上では道や建物、標識などによって位置を確認することができるが、海上では異なる方法で位置を確認しなければならないこと。そのためにヤマアテという方法が伝えられてきたことを学ぶ機会となった。また、各漁場での見え方は、一人一人の漁師の経験によるものであり、長い年月をかけて伝えられるものであることを学ぶ機会となった。



体験コーナーの装飾としては、カーペットで範囲を示すのみとし、開放的な構成とすることによって、体験コーナーに参加しやすいようにした。単に魚や星の形が見えることを確認するのではなく、3つの場所から見える場所を探すという体験クイズの要素を取り入れて、来館者が主体的に体験活動ができるようにした。体験コーナーの隣には、「嶋瀬山手覚帳」という展示資料を展示した。「嶋瀬山手覚帳」は師崎（現・南知多町）の漁師が、漁場の位置を確認するための「山手」を絵入りで記した帳面である。体験活動とともに展示資料をみることによって、実際の漁師から、どのように見えていたか学ぶことができた。

### 【来館者の声】

- 漁師さんたちの伝統、知恵の伝承方法を学んだ。
- 広い海の中で、漁師さんたちは自分たちがどこにいるのか、山を見てわかるから、すごいと思った。
- 昔の人が海の上での自分の位置を知るのにこのようにしていたんだと体験することができた。

## 【事業全体のまとめ】

本特別展の内容は、多くの人に自らを取り巻く海の世界に対して開眼してもらう機会となった。企画としては地味な特別展ながら、展示資料の性質と物量は圧倒的で、来場客からは非常に好評だった。地元の地域にこんな歴史や文化があったとは、という意外な驚きや地元の歴史文化への愛着・関心を呼び起こす機会となった点で成功だった。図録やパンフレットなどの印刷物に関しても、当地方の海の歴史文化を広くアピールし実際に現地を探訪するツールとして役立った。

また、本展では日間賀島や南知多町など現地との連携・協力関係を作り成功した。なかでも付帯事業の親子向け現地見学バスツアーは、参加者からも地元からも大変好評で、親子で海と地域や自分たちの生活との関わりについて体感し楽しみながら学びきっかけとして大いに貢献した。これら現地との連携関係は、海の歴史文化の魅力を広く伝える歴史文化ツアーリズムなどの将来像に発展させうる糸口となる。

本特別展は、自分たちの日常とは異なる地域像を知り理解すると同時に、現地へ観光・遊び・学習等に行ってみたくなるきっかけとし、歴史文化的魅力を観光振興・地域活性化の一助として役立てることを狙いとしたが、その所期の目的はおおむね達成できた。

## 3. 主な連携・協力先について

連携・協力先名称	連携・協力の内容
1. 日間賀島観光協会	協力 資料借用、関連事業実施
2. 日間賀観光ホテル	協力 現地調査、資料借用、関連事業実施
3. 南知多町教育委員会	協力 資料借用（船車など大口借用）
4. 京都府立丹後郷土資料館	協力 資料借用（海部氏系図）
5. 籠神社	協力 写真・資料の借用・掲載（海部氏系図）
6. 名古屋市立小中学校長会社会科部会	協力 海の思い出アンケート調査実施
7. 名古屋市社会科同好会	協力 海の思い出アンケート調査実施
8. 知多半島観光圏協議会	協力 広報
9. 中日海洋少年団	協力 関連事業

## 4. 主な広報結果について

掲載媒体名	見出し、掲載日
1. 東海アドエージェンシー アートニュース 6・7月号	5月31日
2. 北白川書房 月刊なごや 6月号	6月1日
3. 駿栄社 月刊なごやか 6月号	6月1日
4. 未来創造舎 FACE 6・7月号	6月1日
5. 毎日新聞	特別展「海たび 尾張・知多の海とひとびと」開催社告 6月15日
6. 流行発信 夏休みファミリーレジャーガイド2018 中部版	6月18日
7. プラネット豊田 PIPO 7月号	6月18日
8. 毎日新聞	関連イベント参加者募集告知 6月19日
9. アドキットインフォケーション 咲楽	6月20日



岐阜版 7月号	
10. アドキットインフォケーション 咲楽三河版 7月号	6月20日
11. 山下企画 URこだち 6月号	6月20日
12. 毎日新聞 広告(会期開幕前)	6月21日、25日、29日、30日、7月1日、4日、9日(合計9回)
13. ポトスマイル ポトス 尾張旭瀬戸版 6月21日号	6月21日
14. 知多半島回遊性向上事業実行委員会 ちたんぷ 夏号	6月21日
15. 三重ふるさと新聞社 三重ふるさと新聞 6月21日号	6月21日
16. 中広 フリモ 瑞穂版 7月号	6月22日
17. 中広 フリモ 昭和版 7月号	6月22日
18. 中広 フリモ Sun+GoClub 日進南部・東郷版 7月号	6月22日
19. 中広 フリモ ぶんくらぶ 大府・東浦版 7月号	6月22日
20. 名古屋市立小中学校 PTA 協議会事務局 PTA名古屋 301号	6月22日
21. アドキットインフォケーション 咲楽西尾張版 7月号	6月25日
22. D&H 月刊ゆるり 東海版 8月号	6月26日
23. アドキットインフォケーション 咲楽名東・千種版 7月号	6月27日
24. インテルプレス 学生フリーペーパー REAL 59号	6月30日
25. オール出版 クラブナゴヤ 8月号	7月1日
26. 公益社団法人愛知建築士会 愛知の建築 7月号	7月1日
27. コミュニケ 近鉄ニュース 7月号	7月1日
28. 名古屋観光コンベンションビューロー キラッ都ナゴヤ 7月号	7月1日
29. 名古屋国際センター ナゴヤカレンダー 7月号	7月4日
30. 時局社 時局 8月号	7月7日
31. 山下企画 URこだち 8月号	7月11日
32. 毎日新聞	海たび 尾張・知多の海とひとびと 14日開幕 胸躍る歴史散歩へ 7月12日
33. 毎日新聞	郷土の歴史文化紹介 名古屋市博物館「海たび展」開幕 7月14日
34. こども新聞 夏号	プレゼントコーナー告知記事 7月中旬
35. 毎日新聞	「海たび展」記念講演に100人 7月15日
36. 毎日新聞	「海たび」展でイベント 名古屋市博物館 児童がロープワーク体験 7月16日
37. 毎日新聞	海たび展で20人探検 名古屋市博物館 来月も2回 7月23日

38. 毎日新聞	展示品紹介 カキの身とる光景 身近に 7月18日
39. 毎日新聞	展示品紹介 「世界最古」の大野海水浴場 7月21日
40. 毎日新聞	展示品紹介 アザラシは海の怪異 7月25日
41. 駿栄社 月刊なごやか 8月号	7月25日
42. 東海民報社 東海民報 7月25日号	7月25日
43. 毎日新聞 広告(会期開幕前)	7月26日、28日、8月3日、7日、9日、12日、15日、16日、21日、23日、29日、30日、9月4日、7日、10日(合計17回)
44. 毎日新聞	展示品紹介 尾張と丹後結び貝輪形銅釧 7月26日
45. 毎日新聞	展示品紹介 海辺の歴史伝える「船車」 7月31日
46. 東海アドエージェンシー アートニュース8・9月号	7月31日
47. 毎日新聞	展示品紹介 サメと格闘した海人集団 8月1日
48. 敏弘社 金山総合駅コンコース懸垂幕	8月1日~8月31日
49. 毎日新聞	展示品紹介 古代以来の暮らし 現代も 8月2日
50. 毎日新聞	藻魚テーマに学芸員が講演 「海たび」特別展 8月5日
51. 新潮社 週刊新潮 8月16・23日号	8月8日
52. 毎日新聞	小中学生ら船絵馬作り 「海たび」展 8月14日
53. ゲイン 月刊ケリー 10月号	8月23日
54. 中部経済新聞	ねんげ句会吟行記8月例会 名古屋市博物館 8月23日
55. 読売新聞	海と名古屋の深い仲 考古学・民俗学から紹介 8月25日
56. 毎日新聞	伊勢、大阪両湾つながり考える 「海たび」展シンポ 8月26日
57. 毎日新聞	吉田初三郎作品の複製をプレゼント 8月29日
58. メディアクリエーション HOT PEPPER 9月号	8月31日
59. 名古屋国際センター ナゴヤカレンダー 9月号	9月1日
60. 毎日新聞	海たび展 1万人突破 名古屋市博物館 記念品贈る 9月15日
61. 毎日新聞	「にじ」欄 海たび展で思う 9月15日

以上